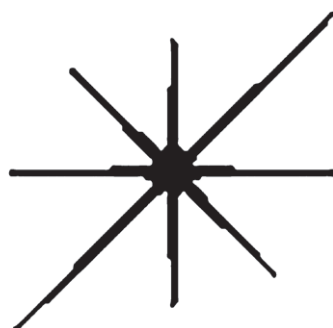


コメット通信 12

[’21 年 7 月号特別付録]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

物語の余熱（6）

——「ブラック・ノート」抄

中村邦生

37 「不器用者は魔術師なのだ」

（13 冊目，30 - 32 ページ）

「ブラック・ノート」の各篇をどの順序で読むか，その選択に関しては折々の興味にまかせ，偶然とも必然とも思える遭遇を楽しんで今にいたっている。どのように選んでも，ひとたび読み始めれば，意想外の思念の動きや気分の揺れが誘い出される。

断章なので当然なのだが，しばしば情報の継続的な統一性に欠けている。これはネガティブなものと考えられがちだが，私は記述内容の矛盾，偏差，逸脱をむしろ楽しんできた。

とりわけ書き手の笠間保の生い立ちや生活ぶり，あるいは人物像の表現に整合性がなく，何者なのか掴み難い。もちろん，ノートを読んだ範囲に限っての印象だし，また笠間当人への私の留意の気持が意外なほど低調のまま過ぎてきたことに原因はあるだろう。おそらく現実の場面での交流の経験がほとんどないので，とりたてて具体的な関心へ結びついていかないせいかもしれないと思う。

簡単なプロフィールは，「ブラック・ノート」と一緒に送られてきた手紙に記してあった。

——職業は写真家，世田谷区の上北沢に住む，父親は埼玉のピーマンの栽培農家，母は中学の国語教師，両親の影響で読書好きだった，大学ではイギリス哲学を専攻したが，5年いて単位不足で退学——が情報の基本にはなっている。しかし，ノートでは娘のいる気配があったり（17），5歳の時に父親が病を得て岡山の叔父家族と同居したことが記してあったりすると（20），埼玉のピーマン栽培の農地は放置したのか，母は教師の仕事とどう折り合いをつけたのか気になるわけだし，また大学では芸術学を専攻し，1年遅れで「引用論」の卒業論文を書いたことにもなっているのは（21），この文脈ではむしろ納得しやすい。

しかしこうした笠間保像の複数化と変幻ぶりは，私自身の気まぐれな読み方とうまく呼応した。笠間保がいつどこで何をしようとも，どのような奇想を追いかけようと，何に化身して語ろうとも，私自身の記憶の奥にある声と呼び覚ますような気分で耳を傾けてきた。そして，何となく私自身にも覚えがあることが書いてあるな，という眩きがもれることもある。

「不器用者は魔術師なのだ」の文中に登場する人物の所業にしても，私自身のこれまでの諸々の行いと重ねてしまう。以下は全文。

「不器用者は魔術師なのだ」

この人は毎日のように運命に翻弄されている。原因はきわめて簡単だ。ちぐはぐで不器用な挙動をまるでくしゃみのように突発的に繰り返す。

秋の終りに近いある休日，私は当の不器用者と池袋の喫茶店で会う約束があったのだが，1時間たっても現れない。いつも私より先に着くのに，めずらしいことだった。連絡しようにも，携帯電話を忘れてきてしまった。

窓際の席から，夕陽が街の翳を浸していく情景を眺めながら，私は雑踏のなかを店に近づいてくる彼の姿を待ちかまえていた。

「もうしわけない、こんな遅くなっちゃって」

いきなり背後から声がかかって不意をつかれた。上気した焦りの表情のまま身体を前にかしげ、杖に頼っている。

「どうしたの？」

私がきいたのは、杖を突いている痛ましい姿のいきさつだった。

「あそこのドアから入れてもらったんだよ」と彼は調理場の横にある従業員用の扉を指さした。「そのほうが、駅から少しは近いからね」

どちらの入口であれ、遠近は大差ないと私は思ったが、わざわざ指摘するほどのことでもない。ついでに言えば、グラスから水を膝にこぼしたときも、私はあえて気に留めなかった。この人はカウンセラーとして多くの人の悩みと苦境に寄り添ってきたし、緊急事態にはいつも冷静な判断力を発揮するのだが、楽にこなせるはずのごく日常的な作業や習慣にかぎって、しばしば不器用でちぐはぐな行動をする。

チェコの国民的作家カレル・チャペックがこんなことを述べていたのを思い出す。

——チャペックの友人のなかに、仲間たちも啞然とするほどの不器用者がいて、たとえば瓶の栓を抜こうとした瞬間、手の中に栓だけ残って、瓶のほうは思いがけない器用さで宙を飛んでいく。このような「特別の魔術」を評価せず、笑いものにすることは間違っていると作家は言う。なぜなら、この「特別の魔術」とは「物に生命を吹き込む能力」に他ならないからだ。器用な人たちは、生命のない物を生命のない物として扱う。それに対して、不器用者が手に負えない相手のように物と格闘するのは、生命のない物をまるで生き物であるかのように扱い、無生物に命を吹き込むことなのだ、と。

「ぼくが魔術師ということになるわけ？ そんなふうに言われたのは初めてだ」

と彼は笑い、鴉に追われて歩道橋の階段で転び、足を挫いたこと、そしてついさっきデパートのトイレの男女別の表示を間違えて、女性トイレに足を踏み入れ、慌てて脱出した経験を告白した。女性トイレにまで生命を吹き込む「魔術」は、擁護することが難しい。

私はどうなのか？ この男と同類と考えざるを得ない。デパートや新しい店舗ビルなどで、文字情報がなくズボンとスカートをデザイン化しただけの簡略なトイレの男女別表示をよく見かけるが、これをとっさに判別できないまま異空間へ突進する危険をおかしそうになるからだ。

しかしたえリスクがあろうと、私は無生物に命を与える「魔術師」でありたいと思う。面白みに欠けた、器用な連中の仲間にはなりたくない。

〈寸感〉

カレル・チャペックの引用は、『カレル・チャペックのごあいさつ』（田才益夫訳、青土社）からのもの。貸し出しノートを確認すると、笠間は2度にわたって借り出しているの、よほど気に入った本だったのだろう。器用な者と不器用な者の世間的な価値を逆転させるチャペックの創見に意を強くしたに違いない。「この特別の魔術を評価しようとしなくて、物に生命を吹き込む能力をもつ人たちを笑い、不器用だとか、能なし、のろま、役立たず、まぬけ、不調法者、うすのろだとか称するのです」とチャペックは言う。笠間保がカウンセラーの「魔術師」ぶりに自分を擬えているように、私もまたおのれの「魔術歴」を通覧した結果、資格ありと判断する。この2週間の行状だけでも、夕暮れどきの電車内で、網棚に置いた買い物袋を下そうとした瞬間、絶妙な「魔術」を行使して、谷中の八百屋で買った愛知県産のプチトマトを見事に活性化させ、ばらばらと床に転がしたのだった。

38 「赤信号を渡る」

(4 冊目 28 - 29 ページ)

「ブラック・ノート」の文章は、読後あっけないほどすぐに内容を忘れてしまうことがあり、文章自体に秘密の忘却作用があるのではないかと冗談ではなく本気で疑うこともある。

細部に耽溺し、気分の振幅に心地よく身をゆだねていたはずなのに、どのような物語だったか記憶できない作品というものがある。アントニオ・タブッキの『インド夜想曲』(須賀敦子訳、白水社)がふと思い浮かんだりするが、「ブラック・ノート」の場合、そうした夢魔を彷徨する感覚とは異なる。もっと表層的な情報の放逸からくる曖昧な感触を残すものだ。きわめて基本的な事実関係をめぐる実相も仮想も、とりたてて頓着せずさりと同列に描かれ、読む者の意識を遊動させる何か見えない力が働いているのかもしれない。したがって、矛盾した情報があっても意に介さずに読み進め、ほとんど忘れてに等しくなり、そのつと新鮮な思いだけが残る。

とりわけ書き手の人物像が著しく複数化していることにその思いを強くする。読み始めると、作者像への焦点が拡散して、具体的な事実の文脈が見えなくなり、見えないことに愉楽さえ感じる境域に入るのだ。ごく単純に言い換えれば、読みの対象となる文章への默契、すなわち〈自伝契約〉(フィリップ・ルジュンヌ)を結んだつもりになっただけでも、読み進むにつれてその契約の手ごたえは希薄になり、ほとんど忘れたのも同然で、複数に分化した作者像にこそ開放的な空気をを感じるに至るのだ。

こうした凡常な思いをやや賑々しく述べてきたことには理由がある。「物語の屈折率」と称する創作方法に触れた文を読んだからだ。ここで笠間 A という教師に仮託して創作論を展開しているのだ。仮託というより、成り代わっているように思う。それだけでなく、笠間には小学校に勤める娘もいる気配だ。どこかの文章では、若いときに結婚生活を経験したが、今は独り身のはずではなかったか。人物像の奇想めいた意表を衝く創造ぶりではなく、平然と惚けたような変幻を描く文にこそ私は心惹かれる。

こう記したとたん、背筋にぞくっと冷たいものを感じたのは、なぜだろうか。あっさりした素知らぬ調子の語りこそ、油断ならない気がするが、ここで立ち止まって注視することもないだろう。

「赤信号を渡る」

いまそこで信号待ちをしていたら、面白い出来事があったの、と帰宅するなり M は言った。彼女は小学校の教員になったばかりで、街を行く子どもたちの行動に注意深くなっている。

角に郵便局、反対側にはスーパーマーケットのある十字路。春の日曜の昼下がり、小学 4 年生くらいの女の子と 40 歳ほどの父親が、楽しそうにおしゃべりをしながら信号待ちをしていたという。

歩行者信号はなかなか青にならない。折よく、行き交う車が途切れた。すると父親が、赤信号を無視して一人で先に渡ってしまい、女の子は取り残された。まだ車は来ない状況を見て、父は「早く来い、早く」とせかす。

女の子は、赤信号なので葛藤状態に陥り、足をばたつかせるだけで渡る決心がつかずにいる。父は「いまなら大丈夫だよ」と呼び寄せようとするが、事態は変わらない。やっと信号が青になり、娘は父のもとに走り寄り、大きな声で泣き出した。「ごめん、ごめん」と父は謝るものの、女の子としては納得できない。

さて、親子のとった次の行動とは？ M もその後の成り行きに興味を覚えた。

大学で文章制作の講師を務める A 氏はこのエピソードを授業の素材に使ってみた。小説制作の重要なポイントを含んでいると感じたからだ。

——みなさん、この出来事は、この先どのように進んだと想像しますか？

T 君の手があがった。「信号を守ることも大事だけど、もっと世の中、柔軟に状況判断しなくちゃいけない局面もある、と父がさとしします」。そうか、言い訳じみてはいるけど、父は娘へのサバイバル教育の機会と考えたわけですね。

W さんの意見。「泣き止む代わりに、女の子は、スーパーでケーキを買ってほしいとお父さんに訴えます」。女の子は、父の軽率な行動を取引材料にするのですか。なかなかしたたかな娘さんで、面白いですね。

F さんが異議を唱える。「親子は、元の歩道に戻って、今度は信号を守った正しい横断をやり直すのではないのでしょうか」。なるほど、それは横断の再履修という、とても教育的行動で納得できますね。

——でも、実はもっと予想外の出来事だったのです。女の子はスーパーマーケットの横に止めてあった父の青い自転車に乗って、先に走り出してしまいました。慌てて父は娘の小さな赤色の自転車に乗って、後を追いかけたのです。しばらく進んでから、娘は自転車を止めて振り返り、はしゃぐように笑い、父を待ち、並走して遠ざかっていきました。どうでしょう？ この意表をつく展開こそが小説的といえませんか。

F さんが即座に答える。「なるほど、わかりました。女の子が父親の自転車にわざと乗る、この小さいはずらは、お父さんの振る舞いを許す行為です」。そう、和解の意味を内包しているようにも思えますね。

W さんの手が上がる。「親子の自転車の交換には、娘が交通規則を守る大人の行動をしたのに、父の方は無視した幼い行動をしたという逆転の意味の面白さがあります」。確かに、そうした皮肉な意味も出てきそうですね。

——他の例と比べて、自転車の出来事が、なぜ小説的と言えるのか。ストーリーを前に進めるだけには留まらない、場面に展開力と弾みを与える屈折があるからです。構成も人物造形も細部の描写も、この〈物語の屈折率〉の創意こそ、小説制作の重要なポイントの一つではないでしょうか。

〈寸感〉

何が「小説的」なのか、範式のようなものがあるのかどうかは措くとして、自転車という道具立てが心に残る話だ。父が娘の小さな赤い自転車にまたがり、父の青の自転車に乗った娘を追う姿が繰り返し脳裏に浮かぶ。

39 「砂遊び」

(4 冊目, 30 - 31 ページ)

「赤信号を渡る」の次ページに入っている文である。ここでも文章制作の教室の講師 A が登場し、内容的にゆるやかな連続性を感じさせる。

「砂遊び」

少年がひとり砂場で穴掘りに熱中している。黄昏の近い時間になってから雨が上がり、陽ざしが広がった。Aは隣町の図書館へ向かう途中、薄紫の花の咲き初めたムクゲの生垣の間から、保育園の庭を眺めていた。

年長組くらいの少年だろうか、プラスチックのシャベルをせわしく動かしては、砂をかきだす。ときどき積み上げた砂の頂上を丁寧に整えているところを見ると、山の形に思い入れがあるらしい。

「たーちゃん、もうお部屋にもどきなさいよ」とベランダから若い保育士が声をかけるが、少年の返事はない。保育士は砂場に迎えにきてしゃがみ、少年の熱中ぶりに微笑んでいた。この静かな見守り方がいいなとAは思いながら、保育園を離れたとき、甦ってくる光景があった。

かつてAは文章制作の授業で、「私の原風景」というテーマのもとに、記憶の奥にある最も古い情景を描き出す課題を出したことがあった。その折、群馬で子ども期を過ごしたF君が、記憶の古層にある「原風景」として、ユニークな保育園時代の話を書いてきた。

——砂場で友だちと落とし穴を作ると、年少の男の子が誘いこまれ、バランスを失い尻から落ちた。味を占めたF君は、その後もひとりで穴を掘り続けた。すると砂の底から大きな運動靴が、左右そろって出てきたという。

F君の記憶のなかでは、なぜか真新しい紺色の靴で、宝物を発見した気分だった。これは自分だけの秘密にしようと、嬉々として砂を埋め戻した。

翌日、園庭での遊び時間になり、真っ先に砂場へ向かったのだが、掘り返しても靴は見つからない。「あれは何だったのか。不思議な気分だけが、今でも続いている。宝物は幻であるからこそ、不滅といえるかもしれない」とF君は文を結んでいた。

提出した文章はそこまでだが、下書きにはもっと先の話があったという。皆の要望で、続きも紹介してもらうことになった。

砂場から出てきた靴には、まったく別の記憶も重なっている。靴が現れた瞬間、持ち主が地下深く埋められているような気がして怖くなり、あわてて砂を埋め戻した。

翌日、恐々と砂を掘り起こしてみたが、靴は消えていた。この靴の記憶には、嬉しさと怖さの両場面が共存することになる。興味深い事実だが、二つの感情はF君にとっては必ずしも矛盾せず、同居しているという。

「でも、謎めいたことがあるんです」とF君はためらいがちに言った。「実は3歳上の姉も、同じ保育園の同じ場所で同じ経験をしているんです」

教室にどよめきの空気が流れた。F君はとまどいながら、付け加えた。「……姉のほうの記憶は、どちらかと言えば、靴の持ち主が埋まっている怖いほうの話です」

もしかしたら、F君は姉から話を聞き、それが自身の記憶として独自の感情を伴い、心に住み着いたのかもしれない。あるいは事態は逆で、姉が弟の話を聞いて自分の記憶として取り込んで語り直し、それが弟に逆転移した可能性もある。

幼い日の記憶は、さまざまな契機を介し、増補と改訂をへて編集される。こうした想像のプロセスを含む全体が私たちの生きた記憶というものなのだ。F君の文章も、曖昧さと謎めいたエピソードを新たに丸ごと呼び入れることで、魅力ある多義的な奥行を持つものとなった。

図書館からの帰路、Aが保育園の庭を覗くと、砂場の穴掘りの少年に仲間がひとり増えていた。

〈寸感〉

記憶の想像作用については、ここに書かれたとおりのことが、よく指摘される。もしこの文に先の「物語の屈折率」に当てはまる表現を考えてみるとすれば、どこだろうか。結びの「図書館からの帰路、Aが保育園の庭を覗くと、砂場の穴掘りの少年に仲間がひとり増えていた」という一文だと思う。この増えていた「ひとり」は、F君の記憶に潜んでいた少年ではないだろうか。黄昏時、子どもの姿をした幽鬼が砂場でうずくまっているのだ。

40 「プロムナード・コンサート」

(35冊目, 1 - 6ページ)

「コンサート」とあるタイトルに自ずと注意が向いた。しかもロンドンでの音楽会のエピソードとなれば、私自身の追懐にも重なる出来事があるはずだ。他に例があるかどうかまだ確かめていないのだが、珍しく本文の前に「付記」が添えられ、「この文は、姪のJがファイルしていた文を転写したもの。大学時代の恩師のS先生の書いた1970年代のロンドンを舞台にした小説風エッセイ。Jは音楽雑誌の編集に従事」とある。「付記」に続く全文を示す。

「プロムナード・コンサート」

家財の差し押えをくったその貧乏な医学生に残されている物は、唯一の家宝とも言うべき叔母の骸骨一体しかない。叔母の名はミリアム。

彼女は医学の進歩に貢献すべく医者一家の出身者としての名誉を重んじ、自身の身体を提供した。関節をつなぎ合わせた人体標本になったミリアムは、首のところに掛け鉤つており、壁に飾ることもできる。医学生に同情したある律儀な外交官は、「家宝」を執行官に見つからないように運び出す手助けをしてやる。

骸骨に緑色のビニールのレインコートを着せて抱きかかえ、パリの往来を小走りで歩き、居酒屋に立ち寄り、バスに乗って身障者用の席に坐らせたりしながら、人々の驚愕と好奇の視線の中をさまよう……と、そんな話がロレンス・ダレルの小説にあったのを思い出した。

『グラモフォン』誌の特集「ロンドンの音楽シーンの今昔」に載ったプロムナード・コンサート(プロムス)の最終日の写真に、紙吹雪を浴びながら、骸骨を抱きかかえて歓呼している中年の男が小さく写っている。隣に気弱そうな若者の痩せた顔も並んでいる。

長い夏の音楽シーズンの最後を飾るこの演奏会はお祭りのな狂騒の場になるので、人体標本の骸骨を連れていくような悪戯心などとりたててとっぴな行動とは考えられず、やや人をたじろがせる程度のユーモアにすぎないだろう。二人から少し離れたところでは、サングラスをかけた、長髪の若い女性が七面鳥の縫いぐるみを左手で差し上げている。

写真はマルコム・サージェントの後を継いで、コリン・デイヴィスがラスト・ナイトの指揮台に初めて上がった1967年のものだという。オーケストラの演壇から客席を見下ろしたアングルで、指揮者の頭の上の方にだらりと腕を下げた骸骨が神妙な面持ちで虚空を見つめている。骸骨に「神妙な面持ち」とは迂闊な言い方だが、とにかくそうした表情に感じられるのだ。

とりとめない想像にちがいないが、ダレルの小説の登場人物が作中から抜け出し、コンサート会場へ紛れ込んでいる感じだ。監督は誰だったか、主人公が映画館にいる人妻に恋をしてスクリーンから逃亡してしまったコメディがあったはずだ。それに似て、虚実の時空が反転して骸骨

をかかえた二人組が、追っ手を逃れて小説の舞台のパリから各地をさまよい、ドーヴァー海峡を渡り、演奏会の賑わいへの誘惑を抑えがたくロンドンのロイヤル・アルバート・ホールに辿り着いた。ことによると、コンサートに行きたいというミリアムの願いを叶えてやるためだったかもしれない。

この想像に現実的な無理があるとすれば何であろうか。他でもない、プロムナード・コンサートのラスト・ナイトの切符を2枚、いや3枚、急に思い立って手に入れるのは、ほとんど不可能だということである。文字どおりプラチナ・チケットなのだ。しかもオーケストラに近い席に陣取るためには、10日以上も前から館外で寝袋を持って列に並ばなければならない。

仮にこの列の中にミリアムがいたとすれば、大いに歓迎されたかもしれない。順番待ちをすることも、さながらお祭りのような趣があるからだ。帽子やシャツにユニオン・ジャックを縫いつけた者、道化師の出で立ちで顔を白く塗りたい者、あるいはフロック・コートや燕尾服で身を固めた者、それぞれが趣向を凝らした格好で集まっている。列の間を物売りも歩き回る。「プロム・オリムピック」と称して、ミルクセーキの飲みくらべ、寝袋の中での着替え競争、ホール一周障害物競争、列に並んだ者たちで演ずるオペレッタさえある。これほどまでして待つのも、ラスト・ナイトの最大のイベント、アーン作曲「ルール・ブリタニア」を歌って盛り上げたい一心からなのだ。

私自身はラスト・ナイトに足を運んだことはないし、今後も行きたい気はない。「ルール・ブリタニア」を歌い、イギリス人の国威発揚の手伝いをする純朴な、それゆえコミカルな異邦人となる役回りに興味がないこともないが、何ごとにもせよ剥き出しの熱狂を苦手とする人間だからである。

7月の後半から9月の中頃までの約2カ月におよぶプロムスで演奏される曲目は、ポピュラーな名曲からめずらしい現代曲まで多岐にわたるが、あらゆる音楽祭がそうであるように、弛緩しきった凡庸な演奏も数多いし、後世の語り草となる伝説的な名演などめったにあるものではない。それだけに、特別な期待を持っていなかったにもかかわらず、これぞ名演と呟きながら、感動を胸に秘めてコンサート・ホールを後にする演奏に出会ったときの心の弾みはこの上ない。まさしく不意打ちのような僥倖と言うべきものののだ。

私にとって、ルドルフ・ケンペがシューベルトの交響曲第5番を振った1974年の演奏とモーツァルトのクラリネット協奏曲をジャック・ブライマーが吹いた1979年の演奏がそれにあたる。ケンペのこのときのシューベルトは、ピエール・ブーレーズに代わってBBC交響楽団の首席指揮者に就任するきっかけになった演奏であることを何年も後に知った。ブライマーの場合、演奏自体の感動とは別に、というか名演であるがゆえに招き寄せたにちがいない、少しほろ苦いエピソードを持っている。

実を言えば、これはプロムスの演奏会ではない。ロンドンの夏は、連日さまざまなホールで演奏会が開かれている。当日、私はなぜかプロムスの切符と思い込んでいて、ロイヤル・アルバート・ホールへでかけた。しかしブライマーの演奏会が開かれるのは、ロイヤル・フェスティバル・ホールであることに入口まで来て気づいた。あわててタクシーで移動し、何とか開演に間に合ったが、このときばかりはロンドンという都市のほどよい広さに感謝した。

引退を噂されるブライマーがモーツァルトの最後のコンチェルトをどのように演奏するのか、名手の晩年様式というべきものに関心があって手に入れた切符だった。晩年の巨匠スタイルによくある、テンポをゆっくりとった端然とした構えの演奏とは異なり、明快にリズムをきざみ、しなやかによく歌う闊達なモーツァルトだった。さすがに流麗なテクニックとは言いがたいが、若々

しさとは違う潑刺とした晴朗感が情に淀むことなく広がる。それでいて、中低音域から下の響きの豊かさが繊細な陰影を作り、一瞬、惜別の情感が明滅する。あたかも束の間、西の空を染めた残照の変幻を見る思いがして、私は2楽章の半ばあたりで思わず不覚の涙をこぼした。

3楽章に入ってしばらくした頃、うっすら香水の匂いのする隣の老婦人の右手が動き、私の左手の甲に置かれた。そして「あなたの感動、とてもよく解りますよ」とでも言うように、そっと撫でてから引込んだ。奇妙な慰めの感触だった。

インターミッションになり、ロビーではグループで談笑する者、プログラムを読む者、ワイングラスを手に宙を見つめる者、それぞれに演奏の余韻の時間を過ごしている。私は窓のそばに立ち、暮れていくロンドンの街を眺めていた。テムズ川の水面が夕陽に照り映えている。耳の奥ではモーツァルトの最晩年の曲が鳴り響き、黄昏のきらめきに溶け込んでいく。

「あなたも、ジャックの演奏を聞きにきたんですね」

という声に振り向くと、隣席の老婦人が笑みを浮かべながら立っていた。薄いベージュのサマースーツに、黄色のブラウスが品のいい柔和な雰囲気を作っている。しかし私は返事をするより、その不自然に紅い唇のあいだからもれた、嗄れた男の声に動揺した。よく見れば、髪は明らかに白かった。

席に戻ると、前半ではそれほど気にならなかった香水の匂いが鼻をついた。プログラムはベートーヴェンの交響曲第7番、指揮はエドワルド・マータというメキシコ生まれの指揮者であったが、どのような演奏であったか、まったく記憶にない。2楽章が終わったところで、おずおずと老人の手がふたたび伸びてきて、私の左手を握った。皮が骨に張りついている痩せた白い手であったが、しっとりとして湿っていた。老いた手が怯えた小動物のように震えていなければ、私はすぐに払い除けたかもしれない。

ホールを出ると老人が身を寄せてきて、こう囁いた。

「ベートーヴェンの7番だったら、昔のプロムスのすごくビューティフルでファニーでエキサイティングな演奏を聞いたことがある。家に放送テープがあるから、今から聞きにこないか？」

「予定がありますから」

私はそっけなく言った。

「あのストコフスキーがBBCを振ったものだよ。興味があるだろう？」

「ストコフスキーの7番ですか？」

「そのとおり」と老人は嬉しそうに続けた。「フラットまで、地下鉄で10分も乗れば着く。ぜひ一緒に楽しい夜の仕上げをしようじゃないか」

「私にはあなたのような趣味はない」

とっさに出た言葉がそれだった。音をこってり厚化粧させたストコフスキー版ベートーヴェンが想像できたからだ。老人は「趣味？」と言ったきり、みるみる哀しげな表情になった。意味がすれちがって伝わり、私は自分の発した「趣味」という言葉のおぞましさに気づいた。人間の生き方の選択は断じて「趣味」以上のものだ。小柄な老人の背中が、ひとつの孤独な影となって立ち去った。

3カ月ほど前、BBC放送音源のストコフスキーのベートーヴェンがCD化されたことを知った。1963年のプロムスのライブである。そのニュースを教え子が編集部にいる音楽雑誌で知った夜のことだ。誰もいない大きなコンサート・ホールの仄暗い客席に坐り、開演を待っている老人の夢を見た。

顔を覗き込むと、何とそれは……。神妙な面持ちはここでも変わらなかった。

〈寸感〉

「虚実の時空の反転」と言うならば、いま私が経験した眩惑こそがそれに当たる。1979年の夏、モーツァルトのクラリネット協奏曲をジャック・ブライマーが吹き、エドワード・マータが指揮したロイヤル・フェスティバル・ホールの演奏会に私も出かけたからだ。

インターミッションに紅茶を飲みながら、夕陽に照り映えるテムズ川の流れを見つめていたし、コンサート通の老婦人にも話しかけられた。何やら私の書きそうな文でもある。

一呼吸置き、記憶を整理しようとしたが、そもそも記憶というものをどのように整理したらいいのか判らない。それでも虚空の静寂に耳を澄ますように気持ちを鎮めると、さざめきが木々の枝を渡り、風が身をかすめ吹きすぎていくように感じた。

じんわり滲み出るように記憶の片影が形を持ち始め、これは私の書いた文であるように思えてきた。そうだとすれば、笠間の姪の恩師Sが書いたとする「付記」は虚言なのだろうか。そう断言することにも、ためらいがある。

しばらく黙考し、「プロムナード・コンサート」を再読してみた。ヒントはこの文自体の中に書かれているような気がしたからだ。

——ダレルの小説の中から抜け出し、パリの街からロンドンのコンサート会場まで放浪したミリアムの運命。

どこかに書いたはずの私の文章もまた、時空のよじれの隙間を抜けて転々と渡り歩き、こんな場所に辿り着いたのではないだろうか。束の間の漂着をへて、この先またどこかへ流離をつづけるかもしれない。

胸が騒ぎ、ふいに閃光が身を穿つ。

「ブラック・ノート」は、彼方から此方から抜け出してきた文章の繫留の地なのではないだろうか。そしてまた、どこかで廃棄されてしまった文章の亡所でもある、と。「ブラック・ノート」に集っている文章群は互いに見知らぬもの同士であり、やがてまたそれぞれ何処かへ立ち去っていく運命にある。

私は笠間保なる人物を誤解してきたのかもしれない。彼は「ブラック・ノート」の収集狂、書記、番人なのだ。あるいはすでに彼自身が亡者なのではないかという思いもよぎる。

さまよえる文章群。この先、私は「ブラック・ノート」をどのように読むべきなのだろう。と言っても、特別な義務も使命も負っているとは思えない。ここでいったん休止し、あらためて読み進めることにする。

[続く]

執筆者について——

中村邦生（なかむらくにお） 1946年生まれ。小説家。小社刊行の主な小説に、『転落譚』、『チェーホフの夜』、主な批評に、『未完の小島信夫』（共著）、『『罪と罰』をどう読むか』（共著）などがある。